

六月六日（火）

「本当に、送って行かなくていいのか？」

僕が妹に問いかけると、彼女は「うん」と答えた。大きなスーツケースを引きながら、一人で外に出て行った。

「相変わらず、心配症だなあ」

普段より大人しめのファッションに、地味目のメイクをしている沙綾の姿に一瞬ドキッとしながら、「いつまで経っても、妹だからな」と答えた。

「もう、二十歳も過ぎたんだし、立派な大人でしょ」

「それはそうだけど、そんな簡単に、年齢で切り分けられるか？」

彼女は両手でマグカップを抱え、「うくん」と小さく唸りながら上を見上げた。

「難しい、か」

「それに、妹だから」

「弟だったらどうなの？」

「アイツがもし、弟だったら？」

「弟だったら、ほっぽり出してるな。男なら、自分の身は自分で守れ、って」

「それもそうか」

沙綾はそれ以上突っかかることなく、食卓でさつき作った資料を見直している。打ち合わせを経て書き加えた部分もさつきとデータにしておきたいところだけ、あくまでも彼女らのプロジェクトだから、余計な口出しは控えておこう。

「問題は、脚本ってところだよな」

僕は新しいコーヒートを淹れて、向かいに座る。端っこの方に行ってしまった資料を手元に引き寄せ、目を走らせる。粗も散見されるが、学生がパッと作ってこのレベルなら、ギリギリ合格点か。

「書くだけなら、森田さんとかにお願いしてもいいんだらうけど」

「それだと、みいちゃんの撮りたい画になるかは分からないだもんね」

沙綾は再び天井を仰いだ。そもそも、森田さんに小説が書けることは疑われないが、映像向けの脚本、シナリオなんて書けるんだらうか。フィクション、ストーリーを考案する、肉付けするという意味では似ているけれど、微妙な違いが難し

い気もする。

「そもそも、課題、自主制作のために書いてくれるのかって問題もあるけどね」

「まあね。そこは何かネゴするしかないけど、みいちゃん次第かなあ……」

普段とはまるつきり違う見た目で、真剣に悩む姿、考える姿がとても新鮮だ。表情の一つ一つ、何気ない仕草が気になって仕方がない。

沙綾は僕の視線に気がついたらしく、視線を合わせて、やんわり睨む。

「ちよつと、真剣に考えてるんだけど」

「お、おお。悪い、悪い。可愛い妹と、彼女のためだもんな」

隣の資料をサツと引き寄せて、視線を隠すように目の前にかざす。紙の向こうで沙綾はしばらくムスツとしていたが、それどころじゃなくなったのか、再び真剣な表情で考え始める。

隣に用意しておいた白紙のコピー用紙を取ると、近くに散らばっていたペンを握った。彼女なりに何やら書き出していく。

「みいちゃんの願望、画を優先するんなら、本人が脚本もやるのが一番よね」

「でも、プロデューズも脚本も演出も監督が全部やるのも、仕事としてどうなのか、つてところはあるよな」

「独り相撲の小さな作品になるのも、勿体ないもんね。折角やるなら、いいものにしたいいし……」

沙綾のペンが、ここまでの話を適当にまとめていく。キーワードを丸く囲んで、関係性を何となく書き加えていく。

「今度、森田さんも巻き込んで相談しちゃうか」

「そうね。それがいいんじゃない？ 悩んでも仕方ないし、協力してくれるかどうかかも、まだ分からないし」

沙綾はパーッと表情を明るくして、「森田さんに相談、打ち合わせ」とデカデカとメモをした。二重三重にグルグルと丸く囲んで、ペンを手放した。

「あー、スッキリした」

彼女は椅子から腰を上げ、少し下がって腰を回す。食卓の上に広がっている資料、彼女が書いたメモも、スッキリとは程遠い散らかり方をしている。

「ねえ、なんか食べに行かない？」

彼女は僕にグツと近づき、ヘアメイクにはそぐわない雰囲気と言う。そのギャップがまた、僕の変なところをグツと刺激する。

「でも、片付けないと」

「いいじゃん、そんなの。後でやるから」

沙綾はいつも通りの強引さで、僕の手を引いて立ち上がらせる。大人しめの衣装に、その強引さはちよつと反則だ。僕は彼女に圧倒されるがままに、財布と鍵だけ持って部屋を出る。こういう彼女と、どこで何を食べたらいいだろう。少ない選択肢を必死に探して、ベストな答えを早く見つけねば。

初出 令和三年五月二二日 NOVEL DAYSにて公開